

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄本島における沖縄人の服色嗜好に関する一研究(家政学科)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2008-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲井, 真治子, 比嘉, 美佐子, Nakaima, Haruko, Higa, Misako メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/4581">http://hdl.handle.net/20.500.12000/4581</a>

# 沖縄本島における沖縄人の服色嗜好に関する一研究

仲井真治子\* 比嘉美佐子\*

Haruko NAKAIMA and Misako HIGA: A study of color preference  
of Okinawan women in Okinawa Island.

## I 緒 言

衣服の色の選定には人種・職業・肌色・体格・年齢・季節・環境・容貌などが要因となっていると考えられる。

着用色と人種・職業・肌色・体格・年齢・季節に関する研究を小著第一報<sup>1)</sup>及び第二報<sup>2)</sup>で報告した。今回は環境による着用色の傾向を把握することを第一の目的とした。第二に1962年以來、1966年冬まで継続して来た服色調査から沖縄における五カ年の服色の動向を知ることを目的とした。最後に小著第二報の「着用色と年代」の関係においては20代と30代の間の相関関係を試みたが、これらの間には差がみられなかった<sup>3)</sup>ため、今回は年代の幅を広げて20~30代と40~50代としてその間の差を検討することにした。試料の分析は主に標準偏差と $x^2$ 検定、及び偏差積法で行なった。

## II 調査方法と試料の概観

1) 調査対象 環境と着用色に関する資料、及び年代と着用色に関する資料は年代を20~30代と40~50代の範囲とした。5カ年の着用色の動向に関する資料は変動が最も顕著だと考えられる20~30代に限った。制服・事務服・コート類・ズボン・和服は対象外とし、上・下衣の組合せとワンピースの着用者で、調査員の位置から3~5mの距離範囲を歩行する対象に制限した。調査対象の数は1日平均150~200人、各期間とも5日間で900~1100人となっている。

2) 調査期間と場所 調査は一年に夏季、冬季の二度で、これを1962年から1966年までの5カ年、厚ち10回実施した。このうち環境と着用色に関する資料及び年代差に関する資料は1963年の夏季調査となっている。夏季調査は土・日曜日を除いた7月下旬の五日間、冬季調査は土・日曜日を除いた12月の中旬から下旬にかけて五日間行なわれた。夏、冬服を対象にした理由は、沖縄においては合着が無くても済まされるといわれるほど合着の着用期間が短いためである。調査場所は、環境と着用色に関する対象の抽出を沖縄本島の北部・中部・南部で行なった。北部は本部町の一商店前、中部はコザ市のゴヤナ字路、南部は那覇の平和通りを選んだ。5カ年の着用色に関する資料の抽出は5カ年を通して那覇の平和通りに限った。

3) 調査用紙と調査員 記入用紙はルイス・チェスキンの<sup>4)</sup>の色円板を参考にして筆者が考案し作成した。被験者の着用色と色彩統計盤<sup>5)</sup>と照合し、その中から該当する色相・明度・彩度の番号を上記の記入用紙に記入した。集計は日本色研式<sup>6)</sup>に基づいて14色相に整理して行なった。調査員は琉球大学家政学科の学生12名と筆者を加えた14名である。調査員の各々は、本調査に入る前に琉球大

\* 琉球大学農学部家政学科

学構内において予備訓練と予備調査を行なった。記入用紙に年代・色相・明度・彩度を記入するに当っては3人以上の調整された意見に基づいてなされた。

### III 調査結果と考察

#### 1. 環境と着用色

生活様式・文化が違うという環境の相違が着用色にどのように影響しているかをみるために、主に農業生活に従事している沖縄北部と、文化の中心である南部、それに基地の街といわれている中部の三地域において20~50代の沖縄婦人を対象に考察することにした。

Table 1. Color preference in three Sections (20~30 age group).

第1表 三地域と着用色(20~30代)

Hue	地域 South 南部	Middle 中部	North 北部	Total
Red 赤	77 (85.08)	127 (100.94)	65 (82.98)	269
Blue Green 青 緑	110 (104.06)	112 (123.45)	107 (101.49)	329
Blue 青	184 (138.22)	146 (163.82)	107 (134.81)	437
White 白	179 (214.76)	250 (254.78)	250 (209.46)	679
Grey 灰	76 (84.76)	78 (100.63)	114 (82.67)	268
Others その他	388 (387.13)	490 (459.29)	346 (377.58)	1224
Total	1014	1203	989	3206

\* Df=12  $\chi^2=50.66$

Table 2. Color preference in three Sections (40~50 age group).

第2表 三地域と着用色(40~50代)

Hue	地域 South 南部	Middle 中部	North 北部	Total
Orange 橙	135 (126.66)	131 (130.41)	106 (114.93)	372
Blue Green 青 緑	135 (123.94)	136 (127.60)	93 (112.46)	364
Blue 青	160 (117.47)	110 (120.94)	75 (106.59)	345
White 白	128 (177.39)	188 (182.64)	205 (160.97)	521
Grey 灰	94 (130.41)	119 (134.26)	170 (118.33)	383
Others その他	363 (339.13)	361 (349.15)	272 (307.72)	996
Total	1015	1045	921	2981

\*\* Df=12  $\chi^2=98.45$

はじめに三地域と色相の関係を年代層を二つに分けて、それぞれの間で着用率が高い5色をとりあげて $\chi^2$ 検定を行なった。その結果 $\chi^2$ の数値は50.66と98.45といずれにおいても有意な関係にある。第1表においては赤の出現が中部に高く、南部・北部では期待頻数よりも低い。青緑の出現は地域による差は少ないがわずかながら南部の方で期待頻数より高く、中部・北部においては期待頻数が実測度数より低い。青の出現傾向は青緑の傾向と類似している。無彩色の出現傾向には最も地域差が顕著にみられる。無彩色の実測度は南部・北部に於いては期待頻数より低く、北部においてのみ期待頻数をはるかに上まわっている。第1表における着用色の地域差は、中部の特徴は暖色の着用が高いこと、南部には寒色の着用が高く、無彩色の着用は北部において高いという結果になっている。

第2表に於いては、橙の出現が南部・北部で期待頻数より高く、北部では低くなっている。青緑の実測度数をみると南部・中部においては期待頻数をやや上まわり、北部においてははるかに低い。青の着用傾向は第1表と同様に南部にのみ着用数が高く、北部・中部においては期待頻数より実測度数が低くなっている。無彩色の出現は中部の白以外は第1表の結果と類似して南部・中部には出現が低く、北部に集中している。

次に環境と明度の関係をみるために1から9の明度段階の三地域における散布度を標準偏差で求めた。

Table 3. Value in three Sections  
(20~30 age group).

第3表 三地域と明度 (20~30代)

Value \ Section	South 南部	Middle 中部	North 北部
1	5.5%	6.6%	2.4%
2	4.0	8.7	2.9
3	9.8	9.2	4.3
4	12.4	14.4	7.1
5	15.2	12.2	11.0
6	15.9	11.0	16.6
7	15.4	15.3	17.9
8	11.3	10.0	16.9
9	10.5	12.6	20.9
X	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{(X-X)^2}{N}}$	4.16	2.87	6.86

Table 4. Value in three Sections  
(40~50 age group).

第4表 三地域と明度 (40~50代)

Value \ Section	South 南部	Middle 中部	North 北部
1	3.1%	3.9%	1.1%
2	5.3	4.9	2.3
3	10.3	8.5	3.4
4	9.6	11.6	5.2
5	11.2	13.6	9.9
6	15.3	18.1	19.3
7	17.1	19.6	20.1
8	15.7	10.5	19.8
9	12.4	9.3	18.9
X	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{(X-X)^2}{N}}$	4.58	5.16	7.96

第3表、第4表とも中部における $\sigma$ の数値が最も低く、北部においては $\sigma$ の数値が最も高く、南部がその中間となっている。中明度から高明度の着用が三地域とも支配的であるが、中部においては中明度、高明度に偏する率が比較的低い。北部においては低明度の着用が極端に低くなっている。この結果には彩度の関係が影響していると考えられるので、次に環境と彩度の関係をみることにした。1から9の彩度段階の3地域における散布度を、標準偏差で求めた。第5表、第6表を考察すると、 $\sigma$ の順位は中部・南部・北部の順になっている。南部・北部は中彩度、低彩度の着用が支配的である。中部の彩度は中彩度に集中している。中部における低彩度の実測度数は南部、北部に比して低く、高彩度の度数は南部、北部に比して高い。中部において高彩度の着用が高く、低彩度の着用が低

Table 5. Chroma in three Sectins  
(20~30 age group).

第5表 三地域と彩度 (20~30代)

Chroma \ Sections	South 南部	Middle 中部	North 北部
1	12.3%	7.4%	12.6%
2	13.3	9.2	22.4
3	16.4	15.8	22.0
4	18.9	22.3	20.4
5	21.2	23.3	13.7
6	14.1	14.8	6.6
7	1.8	4.1	1.4
8	1.5	1.8	0.9
9	0.5	1.3	0
X	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{(X-X)^2}{N}}$	7.52	7.97	8.79

Table 6. Chroma in three Sections  
(40~50 age group).

第6表 三地域と彩度 (40~50代)

Chroma \ Sections	South 南部	Middle 中部	North 北部
1	31.4%	23.4%	21.8%
2	25.2	20.8	33.2
3	17.2	21.8	27.6
4	12.5	18.1	13.6
5	8.6	11.2	3.8
6	4.7	3.8	0
7	0.3	0.6	0
8	0	0	0
9	0.1	0.3	0
X	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{(X-X)^2}{N}}$	34.47	9.56	38.56

い、ということは明度に影響して、中部の明度段階の分布が南部・北部に比べて中明度、高明度に偏していないと考えられる。

環境と着用色の関係をまとめると、色相の面では、南部では寒色が好まれ、中部においては暖色が好まれ、北部では無彩色が圧倒的に多い。明度、彩度を同時に考察すると、北部では一般に高明度、低彩度が好まれ、中部では、中明度、中彩度が好まれ、南部の特徴は中明度、低彩度が多く好まれているという結果を示している。三地域に共通なことは高彩度の着用が特に低いということである。以上述べたことから、藤井氏の説<sup>7)</sup>が沖縄においてもあてはまることがわかった。

## 2. 5カ年の着用色の動向

沖縄の女性の着用色の傾向が毎年どのように変わっていくか、をみるために5カ年の着用色を色相、明度、彩度の面から検討することにした。

### 1) 5カ年の色相の変動

はじめに14色相の5カ年における散布度を標準偏差で求めた。第7表の $\sigma$ の数値を横に見てい

Table 7. Color transition in 5 years (summer time).

第7表 5カ年し色相の変遷(夏季)

Hne \ Year	1962	1963	1964	1965	1966	X	$\sigma = \sqrt{\frac{(\sum X - X)^2}{N}}$
Red 赤	4.2%	7.6%	8.9%	9.5%	11.4%	8.32	2.88
Orange 橙	3.6	7.3	7.4	8.2	8.8	7.06	1.82
Yellow 黄	5.4	6.4	5.9	6.8	8.0	6.50	0.89
Yellow Green 黄 緑	3.8	3.0	4.0	4.6	3.0	3.68	0.82△
Green 緑	3.8	3.7	3.0	4.9	6.3	4.34	1.15
Blue Green 青 緑	1.4	10.9	8.9	6.3	12.2	7.49	3.85○
Blue 青	15.3	18.2	18.0	15.6	16.0	16.62	1.23
Blue Violet 青 紫	1.2	1.1	2.1	2.2	1.2	1.56	0.48△
Violet 紫	1.2	2.6	0.3	4.6	1.4	2.02	1.48
Red Violet 赤 紫	0.7	5.7	1.8	7.0	7.2	4.48	2.71
Brown 茶	17.2	4.3	3.9	6.2	5.2	7.36	4.99○
Grey 灰	13.0	7.5	10.2	8.3	6.2	9.04	2.36
Black 黒	5.1	4.2	4.0	5.1	5.1	4.70	0.16△
White 白	24.5	17.5	21.6	10.7	8.0	16.46	6.72○
X	7.1	7.1	7.1	7.1	7.1		
$\sigma = \sqrt{\frac{(\sum X - X)^2}{N}}$	7.08	5.00	5.9	3.17	3.98		

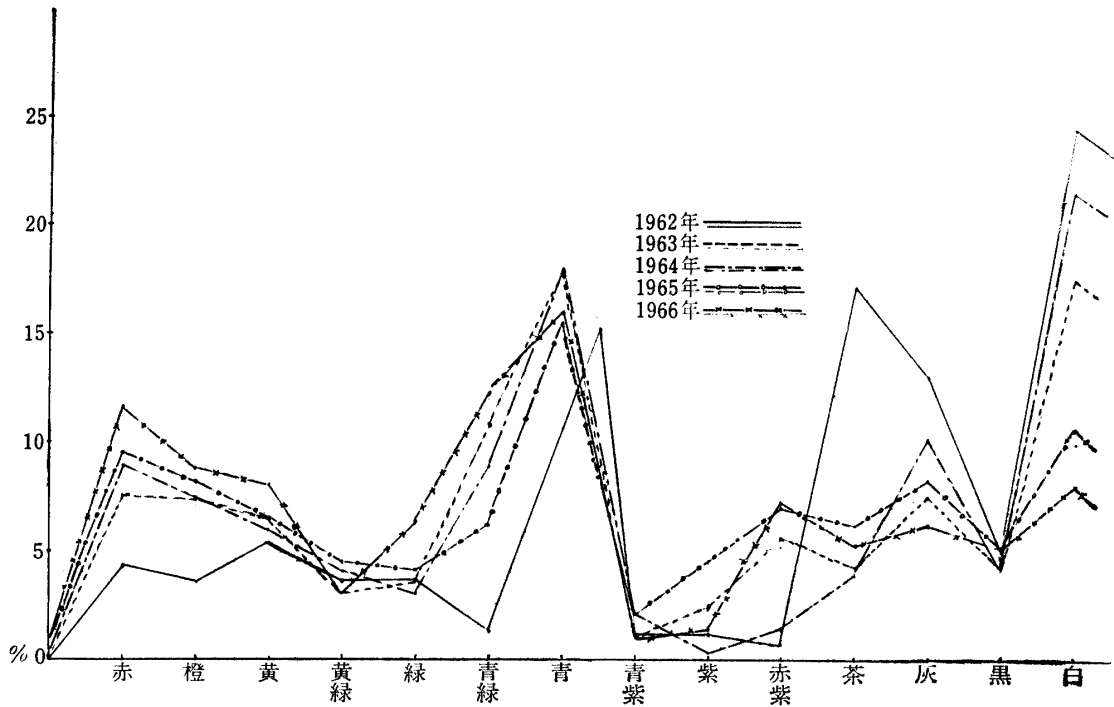


Fig. 1. Color transition in 5 years (Summer time).

第1図 5カ年の色相の変遷(夏季)

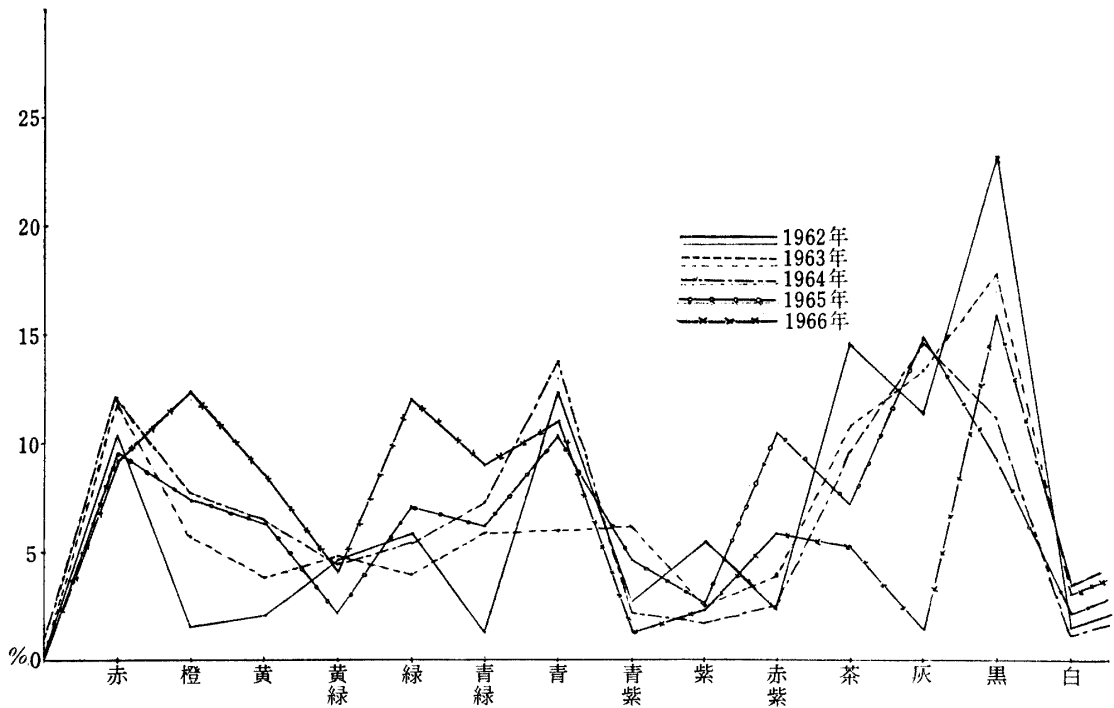


Fig. 2. Color transition in 5 years (Winter time).

第2図 5カ年の色相の変遷(冬季)

Table 8. Color Transition in 5 years (Winter time)

第8表 5カ年の色相の変遷(冬季)

Hue	Year	1962	1963	1964	1965	1966	X	$\sigma = \sqrt{\frac{(X - \bar{X})^2}{N}}$
Red 赤		10.4%	11.8%	11.9%	9.5%	9.1%	10.5	1.15△
Orange 橙		1.8	5.8	7.8	7.3	12.3	7.0	3.39○
Yellow 黄		2.3	3.9	6.5	6.3	8.6	5.5	2.31
Yellow Green 黄 緑		4.7	4.9	4.5	2.1	4.1	4.1	1.00△
Green 緑		5.9	4.0	5.4	7.0	12.0	6.9	1.93
Blue Green 青 緑		1.3	5.9	7.3	6.2	9.0	5.9	3.07
Blue 青		12.5	6.0	13.8	10.3	11.0	10.7	2.66
Blue Violet 青 紫		2.7	6.2	2.2	4.7	1.3	3.6	1.80
Violet 紫		5.5	2.5	1.7	2.7	2.3	2.9	1.33
Red Violet 赤 紫		2.3	3.9	2.4	10.5	5.9	5.0	3.05
Brown 茶		14.5	10.8	9.7	7.2	3.6	9.2	3.65○
Grey 灰		11.3	13.4	14.5	14.8	15.9	14.0	1.36
Black 黒		23.2	17.9	11.3	9.2	1.5	12.6	7.44○
White 白		1.5	3.0	1.1	2.1	3.4	2.2	0.28△
X		7.1	7.1	7.1	7.1	7.1		
$\sigma = \sqrt{\frac{(X - \bar{X})^2}{N}}$		6.27	4.51	4.39	4.09	4.45		

くと、1962年7.08、1963年5.0、1964年5.9、1965年3.17、1966年3.98となっている。第8表においては、1962年6.27、1963年4.51、1964年4.39、1965年4.09、1966年4.45となっている。第7表、第8表の両表から、1962年から1966年までの間にはわずかの起伏はあるが、 $\sigma$ の値は減少の傾向を示している。即ち、着用色が特定の色相に偏するという傾向はだんだん低くなっている。

次に第7表、第8表の $\sigma$ の値を縦に見ていくと、5ケ年を通じて安定度が高い色は、夏季においては、青緑、茶、白で、冬季においては、橙、茶、黒となっている。安定度の低い色は夏季においては黄緑、青緑、黒、冬季においては赤、黄緑、白となっている。黄緑は、夏季、冬季を通じて安定度の低い色相であることがわかった。

## 2) 5カ年の明度の変動

次に5カ年の明度段階の変動をみるために、1から9までの明度段階の5カ年における分散度を標準偏差で求めた。第9表における $\sigma$ の値は、1962年6.64、1963年4.15、1964年4.77、1965年

2.55, 1966年4.23となっている。第10表における $\sigma$ の数値は、1962年8.19, 1963年7.45, 1964年5.31, 1965年4.19, 1966年6.84となっている。明度の変動も多少の起伏はあるが、年々減少の傾向にある。

3) 5カ年の彩度の変動

次に5カ年の彩度の変動をみるために、1から9までの彩度段階の5カ年における分布度を標準偏差で求めた。

第11表における $\sigma$ の数値は、1962年に7.42, 1963年に7.52, 1964年に7.48, 1965年に7.65, 1966年7.97となっている。第12表における $\sigma$ の数値は、1962年に8.79, 1963年8.69, 1964年に8.63, 1965年8.39, 1966年6.69となっている。彩度の数値も毎年減少に向っていることが明らかになった。

色相, 明度, 彩度において, ここ5カ年の間に一般に $\sigma$ の数値に減少の傾向がみられた。色相に最もこの傾向が著しく, 次に明度となり, 彩度における減少は最も緩やかである。このことは沖縄婦人が着用色の選択に彩度の選定が最も消極的であることを語っている。

小著第一報の結果では沖縄婦人の着用色が米婦人のそれと比較すると無彩色, 茶に偏った傾向が大であった<sup>9)</sup>。この傾向は年々減少して来たことがわかった。これらの現象は, 階級色<sup>9)</sup>に支配されていた沖縄の過去の衣生活の習慣からの脱皮とみられる。もう一つには沖縄人の経済生活<sup>10)</sup>の高上にもよると考えることができる。

3. 年代と着用色

小著第二報において, 年代と着用色の関係を20代と30代の間で検討した結果, 偏差積法による相関関数 $r=0.71$ で相関が高く, この間には大きな差がみられなかった。この問題をもう一度追究するために, 今回は年代の幅を広げて20代~30代と40代~50代の間で行うことにした。20代~30

Table 9. Value transition in 5 years (Summer time).

第9表 5カ年の明度の変遷(夏季)

Value \ Year	1962	1963	1964	1965	1966
1	6.1%	5.5%	4.1%	9.1%	11.6%
2	1.6	4.0	7.0	7.3	6.5
3	9.3	9.8	10.4	14.5	17.5
4	13.1	12.4	8.3	10.4	12.2
5	16.3	15.2	15.8	12.5	9.5
6	10.9	15.9	19.9	11.9	6.5
7	18.0	15.4	13.7	13.8	16.9
8	9.9	11.3	7.9	8.6	8.3
9	14.8	10.5	12.9	11.9	11.0
X	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{\sum(X - X)^2}{N}}$	6.64	4.15	4.77	2.55	4.23

Table 10. Value transtion in 5 years (Winter time).

第10表 5カ年の明度の変遷(冬季)

Value \ Year	1962	1963	1964	1965	1966
1	10.3%	10.0%	10.3%	17.8%	3.3%
2	4.4	9.8	10.1	15.5	1.2
3	12.2	14.7	15.4	15.9	10.3
4	23.4	15.4	13.8	11.6	15.8
5	25.6	19.6	18.6	7.3	20.7
6	16.2	15.2	16.6	9.0	21.3
7	3.9	10.0	8.6	8.8	12.8
8	2.7	3.9	4.8	6.1	7.3
9	1.3	1.4	1.8	8.0	7.3
X	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{\sum(X - X)^2}{N}}$	8.19	7.45	5.31	4.19	6.84



Table 11. Chroma transition in 5 years (Summer time).

第11表 5カ年の彩度の変遷(夏季)

Chroma \ Year	1962	1963	1964	1965	1966
1	13.4%	12.3%	18.1%	11.2%	7.9%
2	14.2	13.3	12.3	10.8	9.9
3	19.2	16.4	20.4	18.5	13.7
4	17.8	18.9	21.5	22.8	23.2
5	14.0	21.2	14.7	19.2	21.5
6	18.1	14.1	8.2	11.8	17.5
7	1.5	1.8	2.8	3.0	3.2
8	1.4	1.5	1.5	2.1	2.5
9	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6
X	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{(\bar{X} - X)^2}{N}}$	7.42	7.52	7.49	7.65	7.97

Table 12. Chroma transition in 5 years (Winter time).

第12表 5カ年の彩度の変遷(冬季)

Chroma \ Year	1962	1963	1964	1965	1966
1	9.9%	10.7%	11.7%	9.2%	14.5%
2	24.1	23.2	22.3	16.2	5.9
3	18.2	21.4	23.7	24.2	10.0
4	11.9	12.8	13.1	23.3	22.7
5	20.8	18.4	17.6	16.2	21.2
6	14.5	13.0	9.5	5.7	15.6
7	0.5	0.4	1.2	2.1	3.4
8	0.1	0.3	0.8	2.9	5.0
9	0	0	0.2	0.2	1.1
X	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1
$\sigma = \sqrt{\frac{(\bar{X} - X)^2}{N}}$	8.79	8.69	8.63	8.39	6.69

即ち彩度の偏り方は明度のそれよりはるかに年代差が高いということがわかった。40代～50代になると高彩度の着用がほとんど0に近く低彩度の方に圧倒的に集中している。他方、20代～30代においては高彩度の着用は40代～50代よりは高くなっている。しかし着用率が最も高いのは中明度でその次が低彩度となっている。両年代間において高彩度の着用をさけている。

\* 第二報の「年代と着用色の関係」と統一させるために地域を南部の那覇に限った。

\*\* ここにおける黄、橙はいずれも彩度系列に近い黄、橙で、いわゆるベージュと呼ばれる色である。

代と40代～50代の着用色の相関関係を偏差積法で求めた結果、相関係数\*  $r=0.28$  で低い相関を示している。

着用率\* の高い色相では、青緑、灰が、両年代間における着用傾向が似ている。着用率の低い色相では、青紫、紫、緑が、両年代間における差が少ない。年代別色は着用率の高い色相では、青、白、橙、で、着用率の低い色相では黄緑となっている。これらの年代別色の中で20代～30代に偏っている色相は、青、白、赤、赤紫、黒で、40代～50代に偏っている色相は茶色、黄\*\*、橙\*\*、となっている。次に明度と年代の関係を第3表、第4表でみると、南部では20代～30代における偏差値は  $\sigma=4.16$  となっており、40代～50代における偏差値は  $\sigma=4.58$  となっている。40代～50代の明度は高明度の着用が低く低明度に偏り、この傾向が20代～30代に比べて大である。彩度を年代別に比較するために第5表と第6表をみると南部における20代～30代の  $\sigma$  の数値は7.52で、40代～50代における  $\sigma$  の数値は34.47となっている。

#### IV 結 語

本研究は、環境、年代の違いによる着用色の傾向を検討することを目的に、沖縄の北部、中部、南部、における 20～50 代代の沖縄婦人の街着を調査対象に、ルイス・チェスキンの色円板、及び日本色研式の色彩統計盤を使用して行なった。更に、沖縄における 5 カ年の着用色の動向を把握するために、沖縄の中心都市、那覇における 20～30 代の婦人の街着を調査対象として行った。χ<sup>2</sup> 検定、標準偏差、及び偏差積法による資料の分析から次項の結果が得られた。

1. 沖縄本島の三地域（南部、中部、北部）と着用色の関係を、色相、明度、彩度の面から検討した。1) 着用率の高い五色相と三地域を χ<sup>2</sup> 検定したが、有意差がみられた。南部においては寒色が好まれ、中部においては、暖色が多く好まれ、北部においては無彩色に偏っている。という傾向がみられた。2) 三地域の明度、彩度を 1 から 9 段階に分けてそれらの分布度を標準偏差で求めた。明度、彩度ともに σ の数値に顕著な差がみられた。中部においては明度、彩度ともに σ の数値が低く、南部、北部の順に高くなっている。即ち、南部、北部の分布は、明度は中明度、高明度に偏り、彩度は中彩度、低彩度に偏っている。中部における明度・彩度の分布は、他の二地域に比べてこの傾向が低く、低明度、高彩度にも広がっていることがわかった。

2. 5 カ年の着用色の変動をみるために 1) 14 色相、及びその明度、彩度の 5 カ年の分布度を標準偏差で求めた。その結果、σ の数値は年々減少していく傾向を示している。

この傾向は色相において最も顕著で、その次明度、彩度の順位で σ の数値が減少の傾向を示している。全般的にみた σ の数値、及び σ 値変動の割合も、色相、明度、彩度の順に高くなっている。沖縄の婦人が色の三属性で一番むつかしいとされているのが彩度であることがわかった。2) 5 カ年を通しての色の安定度は季節に左右されるもので、夏季の服色においては、青緑、茶、白が安定度が高く、黄緑、青紫、黒は低い。冬季の服色では、橙、茶、黒が安定度が高く、赤、黄緑、白が低い。季節に関係なく安定度が高い色相は茶で、季節に関係なく低いのは黄緑となっている。

3. 年代と着用色の関係は、20～30 代と 40～50 代の間隔から着用色に差がみられた。年代弁別色は、青、白、赤、赤紫、黒、茶、となっている。年代と明度との関係にも差がみられた。年代と彩度の関係が最も顕著であった。

今回の服色研究は、地域差と年代差を 1963 年夏の資料に限り、5 カ年の服色の動向を那覇における資料に限った。更に 20 代と 30 代のみを 5 カ年の変動の対象とした。今後はそれぞれの要因を全て包含させた調査を各季節ごとに、毎年継続していくことによって、沖縄における服色を体系づけた。終りになって申し訳ございませんが、資料の分析に、統計の御指導を賜りました。東京教育大学助教授、岩原信九郎博士、本学教育学部助教授、小橋川慧博上に深謝致します。

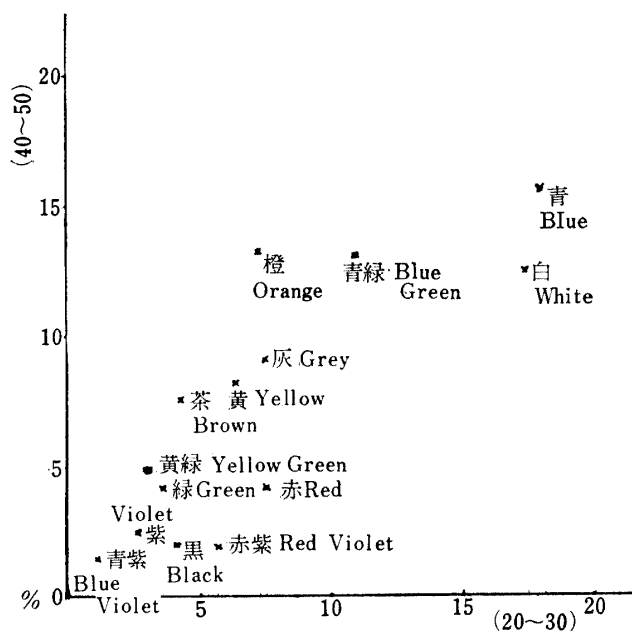


Fig. 3. Color preference between two age groups ( $\gamma=0.28$ ).

第3図 着用色と年代

## 参 考 文 献

- 1) 村田治子・比嘉美佐子 1963 家政学雑誌, 61: 183—189.
- 2) 村田治子・比嘉美佐子 1964 琉球大学農家政工学部学術報告, 11: 153—160.
- 3) *Ibid.*, 157—160.
- 4) Louis Cheskin 1953 Color Wheel for Color Planning.
- 5) 財団法人日本色彩研究所, 色彩統計盤.
- 6) 山崎勝弘 1963 被服美学, 147—154.
- 7) 藤井千枝 1963 衣服と色, 123—125.
- 8) 村田治子・比嘉美佐子 1963 *op. cit.*, 186.
- 9) 嘉数津律子 1960 琉球服装史, 103—111.
- 10) 森岩謙一 1958 ドレス・デザイン, 90.

### Summary

In this paper, I made an attempt to examine the factors which control the color preferences in clothing; that is to say, the Color Preference in Relation to Different Circumstances, the Color Preference in Relation to Different age groups, and the Transition of Color Preference in the Past Five Years (1962-1966). In the summer of 1963, the women in their twenties, thirties, forties, and fifties were surveyed in Naha City (the Southern section of Okinawa Island), Koza City (the Middle Section of Okinawa Island), and in Motobu (the northern section of Okinawa Island), in order to find out the factors in the Color Preference in Relation to Different Circumstances and the Color Preference in Relation to Different age Groups. In order to find out the factors of the Transition of Color Preference in the past five years (1962-1966), the women in their twenties and thirties were surveyed in Naha City during two seasons, summer and winter, from 1962 through 1966. All data was analyzed by  $\chi^2$  test, standard deviation and Pearson's  $r$ . A summary of the Methodology (M) is indicated below followed by the results (R) obtained.

1. (M) The three sections in Okinawa Island were investigated and analyzed in relation to the color preference in clothing as to hue, value, and chroma.
  - (R) 1) Hue, Value, and Chroma had statistically significant relationship as to the sections.
  - 2) Warm color was preferred in the middle section of Okinawa Island. Cool color was preferred in the southern section of Okinawa Island, and non-chroma color revealed frequently in the northern section of Okinawa.
  - 3) The people in the southern and northern sections of Okinawa Island preferred middle and high value colors and they preferred middle and low chroma colors.
  - 4) The northern section showed the tendency above much more than the southern section.
  - 5) In the middle section, low value color and high chroma color were shown more frequently than in the southern and northern sections.
2. (M) the transition of color preference in the past five years was examined from the stand point of hue, value, and chroma.
  - (R) 1) Hue, and Value had very statistically significance in relation to years.
  - 2) Chroma had lower significance in relation to years.
  - 3) Every year value of deviation has been decreasing.
  - 4) Generally, hue had the smallest value of deviation and Chroma had the largest.
  - 5) Brown had the highest stability and yellow green had the lowest stability during the past five years.
3. (M) The color preference in relation to age groups was examined between twenty and thirty age groups and forty and fifty age groups.
  - (R) The result was statistically significant.